留学報告書
～８カ月の留学が教えてくれたこと～

クワントレン・ポリテクニック大学
国際文化学部（長期）

本留学報告書では、クワントレン・ポリテクニック大学での留学を通して学んだことや、バンクーバーでの生活の思い出、苦労したこと、そして自身の成長について報告いたします。

私が留学を決めたきっかけは、小学校低学年のころに出会った、オーストラリアに住む母の友人の存在でした。母の友人は、日本語が分からない娘たちと、英語が分からない私たちがコミュニケーションを取れるように通訳をしてくれました。その際、英語と日本語を使いこなす姿に憧れ、英語に興味を持ち始めました。そして、英語が話せるようになればどれだけ多くの人々とコミュニケーションを取ることができ、その先にはどのような世界が広がっているのだろうと感じたことが、私にとって大きなきっかけとなりました。その後、英会話塾に入塾したものの、英語の難しさと自分の英語力に挫折を感じ、数か月で退塾してしまいました。中学校に入学してからも、最も苦手な教科は英語であり、成績も思うように伸びませんでした。しかし、苦手ながらも頭の片隅には英語を流暢に話す母の友人の姿があり、心のどこかには英語を話せるようになって世界中の人々とコミュニケーションを取りたいという思いがありました。そして、高校卒業後、十二年間続けてきた野球生活に終止符を打ち、私の憧れである母の友人の姿を目指して本格的に英語の勉強を始めました。大学入学後は、留学に向けて TOEFL の勉強に励みました。無事に長期交換留学の権利をいただき、夢の留学生活が始まるという期待に胸を膨らませたまま、日本を出国する日を迎えました。友人や家族と離れる寂しさも感じましたが、それ以上に小さいころからの夢が今まさに叶おうとしている喜びでいっぱいでした。

しかし、留学先で待っていたのは、私の想像をはるかに超える大きな壁でした。留学前にさまざまなプログラムを通して最善の準備をしたという自負はありましたが、到着後初めての英語でのコミュニケーションでは、自分の想像を超える英語の速さに戸惑い、会話のほとんどを聞き取ることができませんでした。また、自分が発言する際も、「間違っているのではないか」という不安から自信を持つことができず、愛想笑いや相槌だけで済ませてしまう日々が続きました。しかし、授業でたくさんの友人を作れば、きっと英語も上達し、楽しい生活が待っているだろうと考えていました。ところが、私が選択した授業は受講人数が足りず、すべてオンライン授業となってしまいました。オンライン授業では、授業以外での日常会話や授業内での直接的なコミュニケーションを取ることが難しく、友人を作れるような環境ではありませんでした。自分が思い描いていた留学生活と現実とのギャップに苦しみ、

このまま帰国日を迎えてしまうのではないかという不安を抱くようになりました。また、派遣先大学には名古屋学院大学からの留学生が私一人しかおらず、気軽に話せる友人もいなかったため、逃げ場のない苦しい生活だと感じるようになっていました。しかし、周りにばかり頼るのではなく、自分から行動しようと心に決めました。それからは、毎日英語に関する動画を少なくとも一本視聴し、英語で日記を書くようになりました。また、休日には一人でカフェへ行き、初対面の人に話しかけて会話をしてみるなど、自発的に行動するようになりました。そして、幸運にも現地学生が受講する日本語の授業でティーチングアシスタントとして活動させていただく機会をいただき、少しずつ友人も増えていきました。気が付けば、最初のころに抱えていた不安は解消されていました。日本にいたころの私は、周りに流されやすく、いつも誰かの決断についていくことがほとんどでした。しかし、これらの経験を通して、自発的に行動すればさまざまな縁が生まれ、自然と進むべき道が見えてくることに気付きました。このように、不安ばかりだった一学期目でしたが、最終的には周りの方々の支えやさまざまな出会いに恵まれ、充実した学期を送ることができました。

　そして迎えた二学期目、私は念願の対面授業を履修することができました。一学期目には画面越しでしか話すことのできなかったクラスメイトや先生と直接会って話せることがうれしく、初回授業の日には授業開始の一時間前にはキャンパスに到着していたことを今でも覚えています。対面授業は、オンライン授業とは比べものにならないほど充実した環境でした。授業前には週末の出来事や何気ない会話を楽しむことができ、質問したいことがあればすぐに聞くことができるなど、対面だからこそ得られる環境に大きな充実感を覚えました。しかし、対面授業が始まった当初は、「間違っていたらどうしよう」「的外れなことを言ってしまったらどうしよう」という不安を抱いていました。ところが、クラスメイトのほとんどは、間違うことを恐れず次々と自分の意見を発表していました。その姿を見て、私も次第に間違いを気にすることなく、自分の意見を積極的に伝えられるようになっていきました。このころから、人と話す際にも失敗を恐れず、自分の持っている力で必死に伝えようとする姿勢が身に付き始め、自分でも実感できるほど英語力が向上していきました。先生やクラスメイトからも「とても英語力が伸びているね」と声を掛けてもらう機会が増え、自信を持って英語を話せるようになりました。日本では、正解を求められたり、周囲の空気を読んで行動したりする文化が根付いています。私も二十年間その環境で過ごしてきたため、知らず知らずのうちにそれらを当たり前のものとして受け入れていました。しかし、カナダという日本とは異なる文化が根付く地で生活したことにより、失敗を恐れず挑戦する姿勢を身に付けることができました。

　カナダでの八か月間では、授業だけでなく、休日には友人と食事に行ったり、イベントに参加して観光地を訪れたりするなど、さまざまな経験をすることができました。そして、最も印象に残っている場所は、ブリティッシュコロンビア州の州都であるビクトリアと、キツ

ラノビーチから見た夕日です。ビクトリアは、ヨーロッパを思わせる美しい街並みが広がる離島であり、落ち着いた雰囲気の中で、カナダにいながらヨーロッパのような新鮮な景観を楽しむことができるため、とても印象深い場所となりました。また、キツラノビーチで見た夕日は、自分の不安や悩みをすべて吸い込んでくれるような感覚がありました。海と空がともにオレンジ色に染まった景色は圧巻であり、今でも忘れることのできない思い出の一つです。カナダでの八か月間を通して、私は多くの人々と出会い、支え合いながらさまざまなことに挑戦しました。そして、日本にいたままでは経験できなかったことや、考えることすらなかったであろう出来事に直面し、私の「価値観」「偏見」「当たり前」は大きく変化しました。留学生活は、言語能力や異文化理解力の向上だけでなく、自分自身を見つめ直し、これまでの当たり前を考え直す機会となり、人として大きく成長できた期間でもありました。

そして最後に、今回の留学で私が得た最も大きな学びを一つ紹介して、本報告書の締めくくりとしたいと思います。私がこの留学を通して得た知見は、「違いがあるからこそ、美しさは生まれる」ということです。この世界には、それぞれ異なる見た目、言語、文化、そして価値観をもった人々が存在しています。もし全ての人が同じ考え方や生き方をしていたなら、人と出会う喜びや新たな発見、そして互いに惹かれ合うことの面白さは生まれなかったのではないかと思います。人は違いがあるからこそ互いに興味を持ち、理解しようとし、その過程で新しい価値や美しさを見出していきます。私はこの留学を通して、「周りと違うこと」は決して間違いではなく、一人ひとりの個性であり、かけがえのない魅力なのだと学びました。これから先も、自分らしさを大切にしながら、多様な価値観を受け入れ、さまざまなことに挑戦し続けていきたいと思います。以上をもって、本留学報告書のまとめといたします。

ビクトリアにある
ブリティッシュコロンビア州議事堂

キツラノから見た夕日